

COC+シンポジウム パネルセッション（コメント抜粋、要約）

2020年2月17日 共愛学園前橋国際大学にて

■ 宇留賀敬一（群馬県副知事）

・その時に個人として、自分の頭で考えて、自分で行動ができる、何しろ、自分で回りの人を巻き込んで何かをすることができるというのは、実力が無いといけなから、そのために勉強することは非常に重要なので、いい会社がないから、よくない地域ではなくて、いい地域を作っているのも、個人の力だったりするので、そういう大学、企業に甘えるんじゃなくて、個人としてちゃんと頑張っていくということは、単に企業の責任だけじゃなくて、個人の責任としてやらなきゃいけない、そういうのをどういう風にしてサポートできるかなということは、…自分でちゃんとやっていけるような子供たちを育成していくというのはあります。

・東京＝グローバルという大きな勘違いがあって、東京の人は英語喋ってないですし、目の色も青くないんですよ。別に群馬で世界につながっちゃえばいいよなんて言っていて、今群馬県って山本知事と話をしているのは、別に山本知事は大臣にすぐ会えるので、霞が関にお伺い立てないという考えがほとんどなくて、群馬県として世界とどう勝負できるモデルを作っているかという風に意識していて。そうすると、もう霞が関が後ろになるんですよ。

・大学から群馬に来るんじゃなくて、小学校、中学校から群馬に来て、そのまま群馬人になっちゃうみたいな、流れが出来ないかなというので、…下仁田とか、あぁいったところのほうが一人一台 PC の実現の可能性が高くて。むしろ、群馬の中での地域といわれているところに、一人一台 PC で、むしろ、子どものスピードにあった教育というのが、自習も含めてできるし、その空いた時間で、地域課題を解決して。そしたら共愛みたいなところにつながっていくという流れができるとおもしろいなというのが、自分の中で教育イノベーションとして、群馬でやりたいことで、一番大きい。

■ 曾我孝之（群馬県商工会議所連合会会長）

・地域に基盤を置くことは大事なことで、そして専門学校含めての内容がすごく充実してきているのと、ここ数年感じています。まず、地域に地元で学びたいと思えるような大学、専門学校がなければダメなので、まず教育機関のレベルでは、そういう意味では高くなっているの、大変ありがたいなと思っています。…今の傾向をさらに続けていただきたい。そのためには…教育機関の経営者、そこで教える方、そういう方ができれば首都圏の大学との連携を深める必要があるんじゃないかなと。

・東京にある企業の中で、精神的な取り組みをしているような代表的な企業と色々な面で接点をもっと持つべきである。ある意味で、そうすることによって、東京の素晴らしさがわかったり、逆に東京の弱点もわかってきますので、そういう意味では、地元への定着が、逆に高まる可能性がある。

・やはり高崎ばかり行ってないで、もっと前橋に近づいて、そして群馬県内で色々な地域との関わりを先生方も生徒さんに

も指導してほしいというのをお願いしているので、企業との関わり、地域との関わりを持つと、群馬のよさがどんどんわかって頂けるんじゃないかなと思います。そういうのを提案していきたいかなと思っています。

・やはり産業界という立場で、ある程度きちっとした雇用状況の確保のレベルをあげていくことが、地域の問題を含めて、働き方改革への問題も含めて、勤めていけたらいいなと思う企業を作ることが我々の責任でもあるし。あとは、やはり入った方の離職率が県内の大手でも意外と高いものですから…働きがいや常々を与え続けられるか、そのあたりの責任が企業にとっては、大変大きな責任じゃないかと思っています。

・群馬県出身の方で海外で活躍している、ないしは、海外で活躍して、東京の色々な会社の話をしてきましたが、そういうような方々をもっと教育機関の方はお使いになったほうがいいんじゃないのかなと。特に、群馬県人って故郷思いが多いですから、前橋のためなら行くよ、とか、群馬のためなら行くよ、というような方がたくさんいらっしゃいますので。これを活用するのもすごく、コストもそんなに掛からないしすごくいいんじゃないかなと思います。

・東京に向けての前橋、群馬のよさを発信していく必要はすごくあるかなと思っていますし、東京にいる人材にどんどん群馬にお手伝いに来てもらう機会を増やすことによって、すごくいい効果が出てくるんじゃないかという気がします。

・地域の人材がいないとダメなんですよ。とくにこれから望まれる人材というのは、最終的にはクリエイティブな人材じゃないかなと。このクリエイティブな人材というのは、この地域の中でどう育てられるか、それによって、優秀な企業が出てきてくれて、…それがいい就職の受け皿になってもらうような、いい関係を作っていくかないと。

■大森昭生（共愛学園前橋国際大学 学長）

・スタートした時よりも地元への就職というのが、実は、飛躍的に上がるわけだったんですが、予定では、それがまあまあというところであるというのは事実ではあるんですが、ただ、別の見方でいくと、おもしろいデータがあって、群馬県出身の学生たちの地元定着率はグッと伸びてきたということがあります。これは、ニワトリが先か、卵が先かっていうのは、実はあることは承知です。…今まで大学は、地域を学生が知る、地域で学ぶ取り組みというのはあまりしてこなかったし、地域の企業さんとの接点や関わりも作ってなかった。だから、学生たちには悪いことをしたかなと思っています。東京にいくなれないと思いついて入っている学生がかなりいたんだと思うんです。ただ、そういう接点を持つことによって、東京もちろん、ひとつの選択肢であるし、だけど、その選択肢の中で、地元で頑張りたい、と。で、頑張りたいと思った人には、頑張れる土壌があるということを学生たちは知った上で、そうすると学生たちは選択します。

・実は、学校の中には、課題がないわけですよ。宿題があっても、課題がないというかね。だって、学校に通っていれば何の不便もなく勉強ができるわけで、だけど、地域に出ていくと、そこに課題を見つけることができる。だから、COC+ で取り組んできたことってというのは、そこはかなり大きな意義があって、…大学には山のように出来ないことがあるということ、大学陣が認識することが大事で、全部大学の中に閉じ込めて、全部教え込んであげるとしたら、彼らにそういう力を付けてあげられないわけですね。理論はしっかりやるけど。だから、地域に学生を出してやる。そうすることで、前橋なら前橋、高崎なら高崎、伊勢崎なら伊勢崎の課題が見えてきて。あるいは、企業さんの中に長期間入りこんでいって、働かせてもらう。そうすると、組織的な課題が見えたり、色々。そうしたときに、大学に戻ってきて、また学びが生まれてくる。その実践と議論の

循環を作っていく中で、課題発見力や設定力を、意図的に大人が仕掛けて、身に着けてもらうというのに、これは地域の人に大変失礼な言い方ですけど、地域というフィールドワークは、すごく適しているし、東京じゃない地方だから、なおさら適している。

・世界と群馬を学ぶというのをクロスさせていくと、意外と群馬にグローバル企業は山のようにあるんですよ。自分たちはグローバル企業と感じていないでやっている社長さんがいっぱいいるんだけど、すごいグローバル企業いっぱいあって。そういうところに接していくと、学生たちがわくわくするとか、楽しいという風になってくるんですよ。東京にだけグローバル企業があると思っ込んでたらそうじゃなかった。そういうチャレンジかなと思っています。

・今、高大接続で、様々なチャレンジが県内で起こっています。…群大の理工学部で理系の高校生が研究室に行って、ということもやっているし…それをもっとやりやすくする、それは、バックヤードで大人たちがちゃんと仕掛けてやる。移動手段や金を含めて、それをやると、まさに地域人材育成ってそういうことだなと思っています。今まで、産学官連携で学生を育ててきたけど、今度は小中高大一環の中で、ともに育っていくようなスキームというのが絶対ある必要になっていくと思う。

・大学がガンガン主体性を持たせて、育てて、意見を言って、ディスカッションをして育てたら、大抵、社長はそういう学生が欲しいというわけですけど、行ったら、部長がいる前で堂々と発言をしちゃう、と。お前、けしからん、と。場をわきまえろという話になって、使えないという話もあつたりするわけです。だから、その教育が、ガンガンやればやるほどっていうと、でも教育の中でもそこに埋もれちゃった子は、今度主体性を持たずに、という、すごい問題が絡んでいくところ…そこも一つの焦点を当てて、どうやったら彼が幸せな人生を歩めるかを、その産学でちゃんと議論することが今までなかったと思うんですけど、する必要があるんじゃないかという風に思っています。